

平成 29 年度 学校評価報告書（実施結果）

視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月12日実施)	総合評価(3月27日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①生徒の学習意欲を向上させ、(主体的な選択による学習とキャリア教育を通じて、将来の職業選択を視野に入れた、)自己の進路への自覚を深める教育課程編成や組織的な授業改善に取り組む。また、「プログラミング教育」を教科「情報」から導入し、「全教科」に波及させる。</p> <p>②学校行事や生徒会活動等を充実させ、生徒が自ら学び、自ら考え、行動する意欲の促進を図る。</p>	<p>①多様な生徒の進路希望に対応し、学習効果の向上を目指した教育課程編成や組織的な授業改善に取り組む。</p> <p>②プログラミング教育研究推進校として、全校をあげたプログラミング教育の研究開発に取り組む。</p> <p>③学校行事に関して生徒会を中心に生徒自ら企画・運営するように指導する。</p>	<p>①100分授業の中でより高い教育効果を上げることを目指した授業改善に努める。具体的にはアクティブ・ラーニングについての職員研修を実施し、生徒主体の授業を実践し、生徒による授業評価「授業工夫」項目のポイントを3.1から3.3に向上させる。また、ICTを効果的に活用し、「教材工夫」項目のポイントを3.4から3.6に向上させる。</p> <p>②プログラミング教育についてすべての教科で学習指導案の研究開発に取り組む。</p> <p>③学校説明会を生徒主体で運営することができるよう指導する。</p>	<p>①100分授業で生徒主体の授業改善を目指した改善がなされ、アクティブ・ラーニングの手法やICTを取り入れる事ができたか。</p> <p>②「情報」以外の教科でプログラミング的思考力を身に付けさせることを目指した授業を展開することができたか。</p> <p>③行事で生徒主体の取組を実施できたか。</p>	<p>①ICT機器活用が広がり、新たにプロジェクター2台、マグネットスクリーン3本を導入した。生徒の授業評価においてもペアワーク等の生徒主体の活動を取り入れた授業は理解が深まるという意見が多かった。</p> <p>②生徒主体で取り組むことができた。参加者のアンケートでも好評であった。</p>	<p>①ICT機器を活用し、生徒主体の学びを深める授業内容と指導方法を工夫改善することが課題である。後期の授業評価で「授業工夫」の全教科平均ポイントが3.2、「教材工夫」が3.2であった。職員一人ひとりの授業改善への意識をさらに高める必要がある。</p> <p>②引き続き、生徒主体で実施できるよう指導して行く。</p>	<p>①100分授業は長く感じられるので、休憩を入れても良いのではないかと。数値目標を設定するというアイデアを示したが、数値目標にとらわれすぎているのではないかと。現れた結果を分析し、見方を変えて、いかに表現するかが重要である。授業評価の分析方法にしても、平均値だけで検証しようとする、何ポイントならばよいのか、わかりにくい。デッドラインを示し、下がった場合は、すぐにケアする等の工夫をすると良い。</p> <p>②生徒の活動が前面にでていないことは評価できる。</p>	<p>①【成果】「授業の量と質の充実」を迫った結果として100分授業について、前期の生徒評価(低めの評価、苦しさ)から後期の生徒評価(教科によっては改善、慣れた)に変化した。</p> <p>【課題】生徒による授業評価で工夫のない授業は辛いなどの意見も多いのも事実である。</p> <p>②【成果】プログラミング教育を進める中で、新たに5つの視点を設け、当該教科以外の教科にもその思考の視点を踏まえた取組を広めた。</p> <p>【課題】思考の視点が生徒にまで十分に浸透していない。</p> <p>③【成果】生徒が主体になって運営していることを校外でも高く評価されているが、これをホームルーム活動などでも生徒主体の取組ができればよいように知恵を出し合いたい。</p>	
2 生徒指導・支援	<p>①部活動の活性化を通して、責任感や連帯感の涵養を図る。</p> <p>②生徒一人ひとりの個に応じた支援体制の充実を図るとともに学校規律を継続させる。</p>	<p>①魅力ある部活動となるよう支援し、加入率の向上や途中退部者の減少に努める。</p> <p>②支援教育についての理解を深め、生徒一人ひとりの困り感やニーズを把握、共有して支援し、課題の解決にあたる。</p>	<p>①部活動の活性化を目指し、新入生歓迎会等を実施する。また、保護者向け部活動見学日を設定し、年度当初の部活動加入率を73%から75%に向上させる。</p> <p>②各年次会、企画会議、職員会議で生徒の情報を共有し、必要に応じて随時ケース会議を開くとともに、スクールカウンセラー(以下SC)を有効活用する。</p>	<p>①さまざまな取組を実施し、加入率を向上させることができたか。</p> <p>②ケース会議等の取組が支援の必要に生徒の指導に生かせ、課題解決につながったか。</p>	<p>①部活動加入率は73.3%と当初の目標は達成できなかったが部活動の良さをアピールできた。1年次生の加入率は81.4%であった。</p> <p>②スクールカウンセラーは延べ11回48人の利用となった。組織的な取組で課題解決が円滑に行われ、支援を充実させることができた。</p>	<p>①2年次生の部活動加入率が1年次のときより8ポイント下げてしまった。途中退部者の減少を目指す。</p> <p>②引き続き、教師一人ひとりが生徒に対するアンテナを高くし、教職員間で丁寧な連携をとり、生徒への早期の対応に努める。</p>	<p>②学校評議員会の資料からも計画、振り返り、評価と細かく整理されている。中学校での大沢地区秋祭りのボランティアにおいても、生徒の表情が良い。日ごろの指導の成果である。</p> <p>③組織的な対応を心がけ、スクールカウンセラーを活用している。</p>	<p>①【成果】1・2年次生だけの加入率を取り出してみると目標を達成している。</p> <p>【課題】各部がその活動の魅力をもっとアピールしないといけない。</p> <p>②【成果】ケース会議やカウンセリングといった活発な活動の結果、重篤な事例は発生していない。</p> <p>【課題】スクールカウンセラー来校日は月1回であり、十分ではない。</p>	<p>①年度末における退部率は低いことから、定着していることが伺える。</p> <p>しかし、これといった有効な改善の手段が見つからない状況である。知恵を絞り合いたい。</p> <p>②年次の教育相談担当者や生活指導グループ、年次団、養護教諭などの相互の連携が重要である。早い段階での年次会や職員会議などで情報交換の機会を設けるように努めなければならない。</p>

視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月12日実施)	総合評価(3月27日実施)		
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等	
3	進路指導・支援	①生徒が自らのキャリア発達を意識できる進路指導の充実を図る。	①キャリア発達に配慮した段階的、系統的な進路指導の充実を図る。	①上級学校や企業、外部機関との連携を深め、効果的な進路ガイダンスを実施する。 ①生徒の自己理解や進路意識を促進するために面談等を適切に実施する。	①効果的な進路ガイダンスや面談を実施することができたか。	①各年次段階において効果的な進路ガイダンスを実施することができた。特に、2年次の進学希望者の個別ガイダンスを以前より多く開催できた。また、2月の模擬試験を約90名が受験し、進学への意識付けをすることができた。	①3年次の「推薦説明会」「センター試験説明会」は、次年度回数を増やしてさらに細かいガイダンスとすること。3年次の四大進学希望者への模擬試験受験を更に充実すること。	①きめ細やかな進路指導により、進路未定者が減少している。これは日ごろのキャリア教育の大きな成果である。「産業社会と人間」「課題研究」等、これまで行ってきた教育内容は、他校の参考になる取組である。	①【成果】四年制大学を希望する生徒の実現率は、80%である。日ごろの指導の成果により進路未定者を少なくすることができたと考えられる。 【課題】四年制大学希望者での一般受験の生徒数を増やす。	①来年度は、3年次生対象の一般受験のガイダンスを強化し、センター試験利用による受験の仕方や勉強の仕方を指導し、進路実現につなげたい。
4	地域等との協働	①地域との協働を推進し、地域に信頼される学校づくりを進める。 ②「プログラミング教育研究推進校」として、研究開発に取り組む。	①地域や外部の教育力を活用し、地域に信頼される学校づくりを進める。 ②プログラミング教育研究推進校としてコンソーシアムを活用した研究開発に取り組む。	①地域貢献活動や幼保小中学校との連携を通じて、生徒の自己肯定感を高め、地域からの信頼を得る。 ②プログラミング教育研究推進のため民間企業、大学、専門学校との協働研究に取り組む。	①地域の教育力を効果的に活用することができたか。 ②プログラミング教育研究推進を通して外部機関との協働研究ができたか。	①市内の車椅子の会「サイレントフット」代表による福祉講演会を実施した。地域貢献デーを実施し、清掃活動とともに地域の方の話を聞いた。 ②神奈川工科大学と連携し、研究協議・研究発表会を実施した。また大学と連携した学校設定科目を実施した。	①200名以上の生徒が校外に出る場合は、移動ルートや時間に余裕のある計画が必要である。 ②大学での講義をSkypeで配信予定であったが、ネットワークの不調が原因で実施できなかった。次年度は代替案を含めた計画が必要である。	①日ごろの地域貢献活動は高く評価している。交通事故防止対策として、「安全安心まちづくり推進協議会」が市から区に組織変更される。引き続き協力願いたい。4月の桜祭りや9月の秋祭りへの参加協力を望む。 ②高校と大学の連携がスムーズに行われて状況がよく理解できた。	①【成果】学校外活動、ボランティア活動等、連携先や参加生徒数も増え、積極的に取り組んでいる。相模原地区の成人式のオープニングセレモニーにおける吹奏楽部の演奏が好評であった。 【課題】日程調整など事務作業に対する連携に携わる教職員に負担感がある。 ②【成果】神奈川工科大学との連携は十分に深まった。 【課題】他の大学や研究機関との連携がなかなか進まない。	①校外連携についてももっと生徒主体の取組があってよい。部活動の活用などを中心に考え、取り組めるよう枠組づくりに努めたい。 ②プログラミング教育研究推進としては、研究が来年度は最終年度でもあり、神奈川工科大学との連携に絞って推し進めたい。
5	学校管理 学校運営	①すべての職員が県立高校改革の実施を踏まえ、変化に迅速に対応し、前向きに課題に取り組む学校体制を構築する。	①広報活動充実を図るためホームページ、学校案内を充実させ、情報がしっかり伝わるようにする。 ①県民から信頼される学校を目指し、事故・不祥事防止ゼロを達成に向けて、職員の自己管理能力を育成する。	①学校案内の内容を精査し、より見やすくする。また、ホームページを行事ごとに更新し、部活動のページを充実させる。 ①総括教諭を主体とした事故防止研修を実施し、教職員一人ひとりの内面化を図る。	①わかりやすく、新鮮な内容の学校案内やホームページの更新ができたか。 ①総括教諭を主体とした事故防止研修を実施し、教職員一人ひとりの内面化を図ることができたか。	①行事ごとに特集ページを更新し情報発信ができた。 ①プログラミング教育研究の成果をホームページから発信した。 ①全員が参加する形式での事故防止研修会を16回実施した。	①ホームページの部活動分野更新の仕方に工夫が必要である。 ①研究論文、プログラム、学習指導案等、さらに多くのコンテンツの発信を行う必要がある。 ①管理職が中心となる事故防止研修会が多く、グループ内などで総括教諭を中心とした少人数によるグループ討議などを取り入れたい。	①ホームページは非常に効果的である。管理職等による声かけが必要である。 ①不祥事ゼロに向けた細かな取組は評価できる。	①【成果】来校者などのアンケートから、ホームページの閲覧により本校の取組をより広く理解していただいていることがわかった。 【課題】更新の事務作業量の増大と担当者の人材育成が順調に進んでいない。 ①【成果】大きな事故無く取組めた。個人情報等の管理について手続き等を徹底することで職員の意識を高めさせることができた。 【課題】まだ、十分でない側面もある。	①来年度は相模原地区の合同学校説明会の事務局校でもあり、情報発信という点で特に力を入れたい。また、人材育成も図り、継続して業務がなされるように取組みたい。 ①全員を対象とする研修より、グループ討議や個人面談等を増やすことでより実効性が期待できるが、時間的な制約をどう克服するのが、焦点である。